

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第475号 2021年10月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

## 「言葉の力は生きる力」 「書くこと」を通して育む

『室場プライド』  
榎原 真由美

本校では、学校文集を毎年発行しています。この室場小学校に、文集第一号が誕生したのは、昭和三十五年三月です。最初は、児童日記文集「あゆみ」としてスタートしました。創刊号に、こんな文章が載っていました。

「きょうがっこうからかえって、まえのうちにいきました。おかあさんがまえのうちにみしんでふくろをぬっていました。わたしはふくろをきつたり、そろえたりして、おてつだいしました。なしのふくろです。」

(二月十七日(水) 一年 女)  
題と作者名の記述はありません。短い文章の中から、当時の室場の子の生活が、生き生きと伝わってきます。この家では梨を栽培

して二月の閑散期は実に被せられるための袋を家のミシンで大量に作っているんだとか、一年生でも家から帰ってすぐお手伝いするのが当たり前なのかとか、日々の生活が様々に思い浮かびます。「書くこと」は、生活をまるごと見つめることだと実感します。

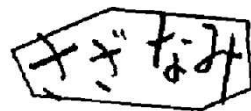
日記文集は、児童作文集「あゆみ」となり、昭和四十七年三月から学校文集「むろぼの子」として、現在六十三号までを発売しています。昭和四十七年三月と云えば、本校が本格的に作文教育の研究に取り組み始めた年です。文章を綴ることを通して、生活のすべてを深く見つめる態度を学ばせたい。生活をよりよく切り拓いていくために、文章を綴ることでものの見

方や感じ方、考え方を育みたいという願いのもと、作文教育の実践が始まったと聞いています。小さな学校であるこの室場小の子供たちが胸を張って自慢できる力を身につけさせたいという当時の先生方の熱い思いは、今に引き継がれています。

コロナ禍の中、昨年は、例年通りに作文指導を行うことができませんでした。削られた授業時間の中から、子供と対話し思いを文にしていくという地道な活動の時間をどうやって作り出すか、悩みました。いわば、作文教育始まって以来のピンチでした。でも、本校の職員はあきらめませんでした。コロナ禍の今だからこそ、子供たちに自分自身を深く見つめることを学ばせたいという願いを込め、一人一人に向き合いました。

本校では、作文日記で担任と子供が対話することを大切にしています。子供たちは、経験や体験を文章に表すことで、自分の思いや考えを形成していきます。そして、言葉をもとに授業で対話し、関わり合うことで「人・もの・こと」を見つめ直し、思いや考えを広げ深めていきます。「室場」という地域への愛着や誇りとともに、五十年間この過程を大切にしてきました。これが、本校の目指す「書くこと」を通して育む『室場プライド』です。

(西尾市立室場小学校長)



▼第百三回全国高等学校野球選手権大会(夏の甲子園)において優勝した智弁和歌山高校。試合終了直後に「礼に始まり礼に終わる」という宮坂厚希主将が述べているのを聞いて

いいチームだなと思った。なかなか言えない言葉だから。翌日の新聞で、中谷監督は、グラウンドにボールが一つでも転がっていけば、「ボールに気付けない選手は試合中に仲間の異変に気付けない」と雷を落とされたことがある述べておられることが記事になっていった。仲谷監督はかつて選手として智弁和歌山高校優勝に貢献している。▼MLBのロサンゼルス・エンゼルスに所属して「二刀流」の選手として広く知られている大谷翔平選手は、道徳教科書の「夢を実現するために」(光村6年)に教材として登場している。内容は、小学三年生のころから「プロ野球の選手になりたい」と言い続けてきたということと、「目標達成シート」である。高校時代に「ドラゴン・8球団」(ドラフト一位で8球団から指名される)という夢をかかなえるためには何をすべきかを書いている。その中に書き込まれているのが、「あいさつ・ゴミ拾い・本を読む・礼儀・感謝」の言葉▼大舞台における華やかに見える活躍の背景に、共通するものとして人間力につながる言葉があることに気付く。あらためて感じた言葉の力である(吉永 幸司)

「問い」を立てて  
考えよう「ごんぎつね」  
蜂屋 正雄

問いを立てて、それをみんなが話し合う学習を計画した。そのためには、  
○問いを持てるようになること、  
○その問いが話し合うに値する問いなのか  
ということが課題になってくる。

○問いを持てるようにするために、まずは、疑問を出し合った。初発の感想の中に、「？」と思っただけの言葉がわかない。  
①言葉の意味がわからない。  
②設定がわからない。  
③登場人物の行動の理由がわからない。  
という、疑問が出てきた。それが「問い」だと位置づけた。

○問いの質を考える  
レベル1  
友だちに聞けばわかる、または、本文を読んでも分からない問い  
レベル2  
自分はこう思うけれど、みんなも聞いてみたい問い  
レベル3  
みんなが話し合ってみようという問い  
という3つの中で、自分の問いはどれに当たるのかを考えさせた。実際には、ピラミッドチャートに付箋で貼って、まずは自分で分類。その後、班で調整し、クラスで見合った。  
一番成果だと感じたことは、「読んで分らない問い」に子どもが気付いていったことである。「どうしてごんは一人ぼっちなのか」といった設定に対する問いは

解決しようがないこと。また、そういった疑問は「話の本筋とはかわりがないかもしれない」と気づけた。

また、レベル2以上の問いを考えていく中では、問い同士が関連していき、問いを解決していることとすつきりしたり、理解が深まったりすることに気づいた。また、そうする中で、問いのレベルを理解していく姿も見られたこと。  
○児童の振り返り  
「ごんのしたことは神様のせいにも思われていたけれど、それからなぜ持って行ったのか。」という問いはレベル3だと思っただけで、クラスの意見では1、先生は2、話し合いの中で3に変わりました。3→1↓2↓3になってい

た。  
「兵十とごんにとって、「あのとこのうなぎ」への思いがちがったことにびっくりした。」  
「まさか、兵十・ごん・うなぎの問いでこんなにいろいろなる事が分かるとは！ものすごくびっくり」「答えがないという答えが出てよかったと思います。」  
「楽しかった、ぼくの問いは一つ上でもよかったですと思いました。」  
教材文を読んで「問い」をつくる。その問いを価値づけしてみんなで考えていく。という学習のパートナーを一つ獲得できた。国語科以外でも、児童の問いから始める学習を深めていきたい。

参考文献  
谷口映介(2020)修士論文「小学校国語科における学習者の「問い」を生かした授業づくりに関する検討」  
(野洲市立北野小学校)

GIGA元年  
授業づくりの不易  
川那部 隆徳

GIGAスクール構想のもと、本校においても一人一端末が導入された。対面式の授業や端末を活用した授業、さらにオンライン授業とでは、端末を操作し活用する技能以外に教師に求められる授業力には、どんな違いや共通点があるのだろうか。これが、現在、私の関心事である。  
コロナ禍にあつて、学級閉鎖等に備え、授業者(A教諭)が別室から教室にいる児童に対し、試験的にオンライン授業を行った。

五年生理科の学習(授業の流れ)  
①目当てを確認する  
「天気予報をいかして、どのように食品ロスを減らすことができるだろうか。」  
②資料を読み取る  
天気予報をいかすスーパーマーケットの資料(教科書)を読み取る。  
③課題に対する考えを提出する  
自分がコンビニの店長だったら、天気予報をどのように食品ロスにいかすかを考え、端末に打ち込んで提出する。(二五分間)  
④考えを発表する  
⑤振り返りを打ち込み提出する

「大変だった。」  
授業後、A教諭の第一声である。  
③の活動時、提出された各自の考えに対してコメントを返信し、提出の遅い児童へは、ヒントを与えたり、指示を出したりと、一五分間一対一のやり取りを続けていた

とのこと。参観者には見えづらい、授業の表面には現れにくいところで、個々に対する支援が展開されていたことを知った。

「考えを提出した時点で子どもの学習は完結してしまつた。」  
画面に添付されているサイトを開いたり、キーワードを打ち込んで考えを練ったりする自学の姿が見られた一方で、児童の考えは、「暑いときは冷たい商品を、寒いときは温かい商品を多くする」に集約された。対面であれば、すぐさま「天気予報には、暑い寒いだけじゃなくて、晴れや雨の予報もあるよね。」と揺さぶりを、思考を広げるであろう。ところが、授業者は個への対応に追われ、全体像の把握が困難であつた。しかも、各自が考えを提出した後、児童の課題追究への意識は途絶えていた。

国語の授業だと、児童が発する微妙な言葉のニュアンスの違いを比較し、各々の考えを交流して言葉の学びを深める。意外な発言に学習の質を高めるチャンスがある。しかし、追究姿勢を維持させることが、オンライン授業では対面授業以上に難しいことになる。

A教諭は、教科担任制により、同学年の他の二クラスでも同様の授業を行っており、「三回目にと授業を戻して、三回目にと授業を戻して、三回目にと授業を戻して」と児童の実態がわかり、予想される反応への対応を事前に考えて、発問を準備することができたから」と言う。  
端末の操作上の工夫次第で解決できることも多々あるであろう。でも、個への支援、課題意識の持続化、実態把握、発問の精選等々。ここに「対面」と「オンライン」、授業づくりの不易が見えてきた。  
(栗東市立治田東小学校)

大運動会

司削 裕之

今年度の運動会は、規模を縮小しての実施となった。各学年種目を二種目(短距離走、表現運動)に絞り、二学年ずつの三部制で行った。保護者には、オンラインで当日の様子を生配信した。一年生にとっては、小学校生活初めての運動会だ。「たったこれだけ」という思い出にならないように、振り返りも工夫せねばと思った。運動会のことを日記に書く時間。「運動会で、自分たちが出たものは何ですか」と尋ねると、「短距離走」「ダンス」と返ってきた。「他には」と聞くと、「開会式」「ラジオ体操」「閉会式」が増えた。今度は「運動会で、自分たちが観たものは何ですか」と尋ねた。「六年生の旗の演技」「六年生の短距離走」「応援したこと」という答えだった。すると、「出たもの、観たもの以外にもあります」と手が挙がった。そこで、「他にはどんなものがありましたか」と尋ねてみた。「高校生の応援」「衣装をつけたこと」「参加賞でもらった蛍光ペン」「先生たちががんばっていたこと」「人工芝で並んだこと」「練習をがんばったこと」「運動会の旗を作って飾ったこと」と話題が広がった。まだ手が挙がっていたが、「では、一番心に残っていることを書きましよう」と書く活動に移った。

○わたしはダンスがいちばんこころにのこっています。2きよくめはおかあさんがすきなきよくなのでげんきをだしてたのしいおもいでをつくりました。  
○わたしのこころにのこったのは、はたのことです。わたしは、どこにはたがあるかさがしました。みつけたのでドキドキしました。はたがあつたのでがんばろうというきもちがこころにつたわってきました。  
○わたしがこころにのこったものは、六ねんせいのはたのえんぎです。なぜかというとはんというおとがきもちいいからです。  
○たんきよりそうでAさんにまけたことはすこしびっくりしました。なぜかというとはんがいていたほいくえんは〇〇ほいくえんです。そしていちばんあしがはやかったのはほくです。いつもともだちとこおりおにをやっています。それがおがっこうにはほくよりあしがはやいひとがいるなんてびっくりしました。

そんなAさんは、日記にこう書いていた。

○ぼくは、一ばんこころにのこったのは、六ねんせいのはたのえんぎよりそうです。なぜかというとはんよりちよっとはやかかったからです。

上には上がいることを知った二人。小さな運動会だったが、一年生にとっては大きな経験になったようだ。

(京都女子大学附属小学校)

聴く力を育む学校づくり

箕浦 健司

十月一日、この日の朝の学習の時間は、校長先生による校内放送。テーマは『聞く』と『聴く』。

「みなさん、『聞く』という漢字は知っていますか。人の話は、何で聞きますか。そう、『耳』で聞きますね。あと、何がありますか。そう、『話し手の方を』『目』で見てくださいね。もうありませんか。そう、『心』です。話し手が伝えたいことは何なのかということとを考えながら聞きますね。この目と耳と心、すべてが入った漢字があります。『聴』と言う字です。この漢字も、『聴く』(きく)と読みます。毎日、朝の会のスピーチの時に、この『聴く』ができていく学級がたくさんあります。校長先生はともうれいしいです。みなさんには、これから、『聴く』を大切にして欲しいと思います。」

コロナ禍で、授業中、机を寄せ合っている話し合い活動は制限されている。しかし、この機会を逆に生かし、一斉指導の中で要点を落とさず聴く力、話し手の意図を考えながら聴く力を育てる取組を全校的に進めていく。

一年生は、朝の当番のスピーチで、三文で話すことを決めている。このことを話し手と聴き手に意識させる取組を続けている。聴き手は指を折りながらスピーチを聴く。

「三つあった。」

「もう一つやで。」

スピーチ後、聴き手からのつぶやきが心地よい。毎日繰り返すので、自然に聴く態度が身に付いていく。ここから内容に興味を向けるように工夫を加えていく。他の学年も、朝のスピーチは工夫して実施している。校長や教頭、教務部が朝に校舎を見回り、話す姿はもちろん、聴く子どもたちの態度についても褒める。子どもたちのやる気や良さを伸ばすことに繋げていきたい。

四年生のある学級。道徳の公開授業があった。

「〇〇さん。」「はい。」

指名され立ち上がった友だちの方に、学級全員が体を向ける。もちろん、誰が発表するときも同じことが繰り返される。子どもたちは、うなずいたり、納得の表情を浮かべたりしながら友だちの発表を聴いている。その後、似ている、付け足しなどの関連した考えが発表される。聴いていなければ、発言がつかないことはない。この授業では、担任が四月から繰り返し指導してきたことが成果として現れていた。授業後の研究会では、道徳の内容についてはもちろん、このことが話題となった。よい指導は、すぐ学校全体へと広めていく。国語科で聞く力を付けるにも、ベースとなるのはやはり学級経営、そして学校経営。教員が同じ目標をもち、一丸となって進めていきたい。

(長浜市立南郷里小学校)

NPO法人現代の教育問題研究所  
第3回近江の子ども俳句教室  
投句部門(春夏の俳句)

好光幹雄

滋賀県知事賞

赤ちゃんが生まれてくるよ夏の空

滋賀県4年 山元辰剛

大津市長賞

あかとんぼそらにさいてるはなの  
よう 滋賀県1年 水谷優希

草津市長賞

目かくして右に左にスイカ割る

滋賀県6年 荒川玉稀

滋賀県教育長賞

絵日記に大きくひとつスイカの実

滋賀県中学3年 久米琥太郎

大津市教育長賞

母と見た夕立さった茜空

滋賀県5年 中城美種

草津市教育長賞

春風は光といっしょにながれ出す

滋賀県3年 竹内勇樹

草津俳句連盟会長賞

職人の父のほこりは日焼け顔

京都府3年 田仲那帆

NHK大津放送局長賞

そらはれてびかぴかひかるなつの  
うみ 滋賀県1年 皇月 望

KBS京都放送賞

顔寄せ待つこつち向いてよ扇風機

兵庫県6年 浜田雫羽

BBCびわ湖放送賞

水遊びみんなの笑顔はじけてる

滋賀県5年 橋本稟汰郎

FMおおつ賞

パチパチとせんこう花火橋の上

滋賀県3年 伊庭愛美香

えふえむ草津賞

かき氷あまいシロップたつぷりと

和歌山県4年 木村心優

朝日新聞大津総局長賞

雨がやみ晴れた空には二重虹

大阪府5年 佐藤優希

毎日新聞大津支局長賞

垂直に重なり合うよ油蝉

京都府4年 西川 慧

読売新聞大津支局長賞

くものみねすきなやさいとせいく  
らべ 京都府2年 浮村美千子

産経新聞社賞

風吹いて向日葵ゆらとゆれました

京都府3年 中川 葉

中日新聞社賞

夏の夕男児の頬のマスク焼け

滋賀県中学3年 竹村京華

京都新聞賞

夜の街静かになったセミの声

京都府4年 奥村涼司

現代の教育問題研究所長賞

ランメニニュー雷が鳴り屋根の下

滋賀県中学3年 谷 春秀

現代の教育問題研究所長賞

塾帰り毎回夕立バスにゆれ

京都府5年 田中花穂

現代の教育問題研究所長賞

あさがおが水をのんでわらってる

滋賀県2年 二宮 奏

今回も全国より素晴らしい作品  
が届きました。その中で私はこの  
作品に次の選評を添えました。

「職人の父のほこりは日焼け顔」  
なんて素晴らしい俳句でしょう  
か。那帆さんのお父様に対する尊  
敬の気持ちが、「父のほこりは」  
という言葉から痛いほど伝わって  
きます。同時に「日焼け顔」の表  
現が職人として心をこめてお仕事  
をされているお父様の誠実さにぴ  
つたりですね。この句を読んだお  
父様は、きつと胸がいっぱいにな  
られるにちがいありません。

最後に、滋賀県知事様はじめ多  
くの皆様からご後援、ご協力を賜  
りました。実行委員長として厚く  
御礼申し上げます。尚、FM草津  
十月、十一月「俳句5・7・G0  
の時間」でも21の大賞に選評を  
添えて放送いたします。その後は  
オンデマンド放送で全国、どこか  
らでも聞けます。FM草津のHP  
をご覧ください。更に、十一月三  
日には入選作品一覧をNPO法人  
のHPに掲載の予定。素晴らしい  
作品の数々をご覧ください。尚、  
十二月十日まで「秋冬の俳句」を  
募集。是非応募ください。深謝  
金木犀零れて絵本の星となる  
(立命館小学校常勤講師)

編集後記

▼九月例会  
(四百七十四回)

近江の子ども俳句大会の入賞・  
入選作品の選考会とともに子ども  
俳句の指導について意見を交流し  
ました。▼作品の指導に話題にな  
った「生活の中で気づいたことや  
驚いたことが5・7・5の17音で  
伝えていれることを大事にする」  
▼節を表す言葉を入れる等です  
▼具体的には「かき氷口のながかき  
持ちはいい」の句で「かき氷」を食  
べた子の気持ちが伝わるという意  
見や「気持ちいい」についての考  
えが知りたいという意見等です  
た。また、「サンダル」のつま先く  
すぐる波と風では、「つま先く  
すぐる」という表現が素晴らしい  
瞬間を捉えている。「サンダル」  
つま先への着目など細かな観察  
をめぐって話題が広がりました。  
このような話し合いをしながら作  
品を読み合いました。▼作品の選  
考の過程で「季語」をめぐって次  
のような意見ができました。俳句の  
募集期間が春と夏ということを示  
して「朝顔・ひまわり・夏休  
み」など、はつきりとした季語が  
あります。しかし、「運動会・梨  
・赤とんぼ」のように秋ではない  
のかなと迷いながら作った作品も  
ありました。話し合いの結果とし  
ては、「雪・スキー・クリスマス  
マス」のように季節感が明確な言  
葉応募した作者の思いを大事にし  
ようということに考えにまとめま  
した。たくさんの応募、ありがと  
うございました。神原真由美先生から  
玉稿を頂きました。深謝。  
(吉永幸司)